

「成長・躍進する吹奏楽部・地区大会銀賞受賞」

私は1990年～1995年まで吹奏楽部に所属させていただいておりユーフォニアムを担当しておりました。

当時を振り返りますとこのような出来事がありました。

- ・吹奏楽コンクールの成績が毎年向上（1993年初の銀賞受賞）
- ・カジュアルコンサートがスタート（1994年第1回開催）
- ・各種楽器が毎年増え充実した楽器環境に（バスクラ、オーボエ、ティンパニ、ビブラフォン等々）
- ・毎年ごとに難易度の高い曲にどんどんチャレンジ
- ・部員数が徐々に増加

と諸先輩方が立ち上げられた創設期の吹奏楽部がより大きく成長した時期だったのではないかと思います。

そのような時期に在籍させていただいたことは大変ありがたく感謝しております。

個人的に高槻中高の吹奏楽部が素晴らしいと思う点は、中学1年生から高校生まで5歳程度離れた年齢の学生で構成されているという点です。

この時期の1年違いは明らかに肉体的にも精神的にも違いがあり、何年も年齢の違う先輩方にいろいろと教えていただく、そして一緒に時間を過ごせるという経験はなかなか他校ではないのでは、と思います。

実際私が入部した中学1年の時に高校3年の先輩に教育担当していただいたのですが、子供が大人の方に教えてもらっているような気分でした。

また当時の部員は全員で30～40名くらいだったかと思いますが、それくらいの人数がコンクール成績やカジュアルコンサートの成功という一つの目標に向かって何か月間も努力する、曲の完成度を高める、という経験は今の自分自身を形作る一つの要素となっています。

そして武部先生が持ってこられる曲は毎年毎年徐々に難易度が高くなっていることも感じていました。

例えば春の猟犬などはそのような思い出があります。

それらの曲を仕上げられることは吹奏楽の技術力が向上しているということと同意義であり、私たちもそのことを感じながら必死で食らいついていった、というように思います。

曲の難易度が高まることは毎日の練習にもやりがいにもつながり、よい緊張感が常にあったように思います。

私自身もはじめはまったく知らなかったユーフォニアムという楽器にどんどんのめりこんでいった記憶があります。

吹奏楽部での在籍期間を通じてこういった成長することの大切さ、チャレンジすることの大切さも教えていただいたように感じております。

高槻中高吹奏楽部がますます発展されることを祈念してやみません。

1996年卒 第7期 松谷直樹